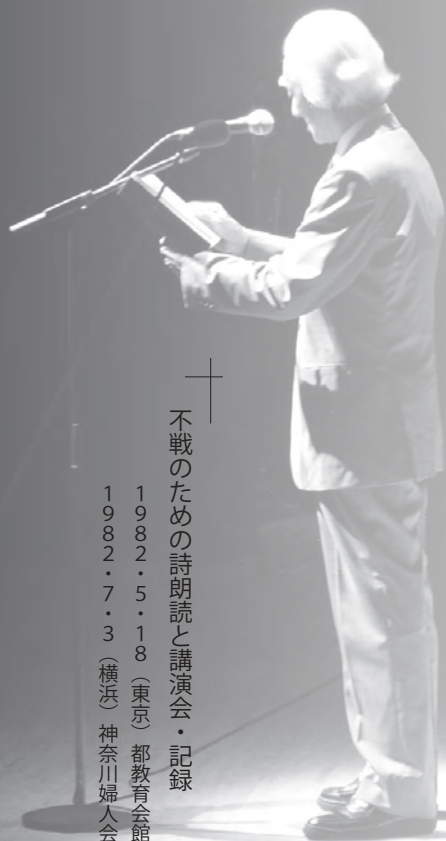


不戦のための発言

いま、地球を滅ぼしつつあるものは何か
いま、地球を救うことの出来るものは何か

桑原 啓善



不戦のための詩朗読と講演会・記録

1982・5・18 (東京) 都教育会館
1982・7・3 (横浜) 神奈川婦人会館

不戦のための発言

——いま、地球を滅ぼしつつあるものは何か
いま、地球を救うことの出来るものは何か

—— 本稿は桑原啓善が35年前に、たった一人で日本全国をまわって行なった不戦非武装の平和運動、その皮切りとなる講演の記録です。35年前と現在、世界と日本をめぐる状況は本質的には全く変わっていません。むしろ、戦争、核兵器、アメリカの核の傘の下の日本、その日本の軍拡化路線、これ等はより危機的末期的症状を呈しています。もはや地球上の誰一人他人事ではあり得ません。桑原の説く〈時代を越えて変わらぬ平和の原理〉を、今こそ真摯に聞き一人ひとりが自分と世界の明日を選択する、ギリギリの時が来ているようです。

序言 戦死者の声の代弁なしの平和運動は皆ウソ

なぜ一人で会をやるのかと、時々きかれます。それは、沢山の詩人達と一緒に会をやれば、聞く人も面白いし、もっとアピールすることは分かっています。それでも一人でやるのは、実は、戦死者の声を代弁したいからです。私は戦時中、特攻基地にいて、多くの戦友を失いました。

実は、戦争について最大の発言権をもっているのは、戦死者です。何となれば、戦争で死んだ者が、戦争と最も深いかかわりをもつからです。また、戦争について本当の事を知っているのは、戦死者です。つまり、戦争で死んで、初めて戦争の意味が分かるという意味においてです。

然るに、今日の平和運動では、彼等の声が全く無視されています。生者の考え方で、吾々がどう生き残るかについて論議されています。これは片手落ちであり、また、これでは本当の平和は生まれません。私は、死者の声を、生者の声と同席させよ、と叫びます。

また、この事は死者を生き返らせることになります。何となれば、彼等は戦争で虫ケラのように生命を奪われ、空しい思いをしています。また戦後は、死者であるが故にその声は全く無視されています。彼等は二重に空しい思いをしています。いま吾々がその声を聞いてやり、その声を現実に反映してやれば、かりにその身体は戻らなくても、その心は生き返らせてやった事になります。

平和とは、基本において、生命の尊厳ではないでしょうか。生者も死者も分けへだてない生命の尊重。平和とは、恐らく生者を生き残らせると共に、死者を生き返らせることだと思えます。いま、この困難な核戦争の危機の時代を、吾々が生き残るためには、死者を生き返らせる程の「いのち」への愛が要求されていると思えます。だから、私は戦死者の声を代弁致します。

では、いったい、彼等は「戦争と平和」について、何と言っているのでしょうか。この十年間、私は詩作を通じて、彼等と対話をしてきました。その結果、私は戦死者の心をこのようにとらえました。

彼等はどう言っています。「一切の武器を捨て、戦争を止めよ」と。つまり「不戦と非武装」が彼等の意志です。彼等は戦争を呪っています。何となれば、彼等の一番大切な生命を奪ったのが戦争だからです。では、どのくらい呪っているかという点、「もし君達が戦争を止めなければ、その前に吾々が人類を滅ぼす」と言っています。私はそのように彼等の心を受け取りました。

吾々生者は「戦争を恐れている」だけです。然し戦死者達は「戦争を憎み呪って」います。だから、吾々が「反核・軍縮」であるのに対し、彼等はハッキリ「不戦・非武装」なのです。私は今日は、彼等の「不戦・非武装」の立場に立って話をすすめ、戦死者の声を代弁を致します。

中略

(p.7~p.15)

き残らせるためです。市民のためではありません、彼等はすべて見殺しです。その証拠は、アメリカは最近、二千万人の市民の死を覚悟する核戦争計画をたてました。その半面、巨大な頑丈な核シェルターを建設しています。一握りの指導者の生き残り用です。これが「力の生活原理」が人類に与えるギリギリの回答です。非情というより、悪魔そのものです。

よって、私は、**人類を滅ぼす被告人として、〈力の生活原理〉と、先程指摘した〈科学技術文明〉を、人類の名に於いて告発します。**

以下私は、第一に、力の象徴である戦争を告発します。第二に、力の結晶である科学技術文明を告発します。そして最後に、武器を捨てて、人間は如何にして安全であり得るか、その細い可能性について考えてみます。

二、戦争の「魔性」性

その一 人心に刻み付ける戦争の罪、それが人を鬼にする

戦争の爪痕、それは死なない

●戦争は最終的に人類を滅ぼします。戦争の本質は魔性だからです。

不戦のための発言

——いま、地球を滅ぼしつつあるものは何か
いま、地球を救うことの出来るものは何か

戦争の悪については誰しも知っています。唯なぜ悪いのかと訊かれると「戦争は多くの人を殺傷し、多くの財貨を破壊するから」と考えます。確かに、一発の原爆で広島十四万、長崎七万の人が一瞬にして死に、第二次大戦で日本だけで三百万、世界では三千万人以上の人が殺されました。また、世界の富の大部分が空しく消えました。

だが見方を変えて申しますと、今言ったこれらの事は、戦後回復可能な被害です。例えば、大戦で三千万人も死んだのに、戦後の人口はたちまちそれを上廻り、廃墟の上に戦前を上廻る壮麗な文明が築かれました。だから、人々は戦争によつて人類は滅びることはないと思ひ込んで、また戦争を繰返すのです。

●然し、それにも拘らず、人類は戦争に依つて確実に滅びつつあります。そして今まさにその滅亡の断頭台に立っています。

それは一体何かと申しますと、戦争の残した見えない傷、一言で申しますと、**戦争による人心の悪化、精神の破壊**による人類の滅亡です。

これが人類を滅ぼす元兇です。 いわば悪魔の残した爪痕、つまり戦争という悪魔が、戦争で人が人ひとり殺すたびに、人間に記した爪痕です。有史以来、人間が戦争に依つて殺した数だけ、その爪痕が人類の精神に記されています。今その毒が吾々の身体に廻り、人類はもう死にかけています。その症状の一つの現れが核戦争です。

人類を滅ぼすものは見えないものです。人は目に見えるものによつてしか、物を判断しようとしません。然し見えないものの中に、真実が隠されているのです。

戦争の爪痕二つ、生命の軽視、物の軽視。その先は大洪水

●では、人類を滅ぼす戦争とは、人心の悪化とは何でしょうか。戦争とは……第一に、暴力の肯定であり、生命の軽視です。戦争は虫ケラのように人間の生命を暴力で踏みつぶします。然も、それを、良い事だ、ヤレヤレと言つて奨励するのが戦争です。これは、狂気であり、まさにその体質は悪魔です。

ですから、こんな事を何年もやっている、人は自然に、生命は虫ケラだ、暴力は良い事だと思い込んでしまい、それが戦後、人の性向となつて残ります。従つて、戦後、犯罪の増加、暴力の横行は当然の事です。

ところが、その最大の被害者は子供達です。彼等は、暴力は良い事だ生命は虫ケラだという中で育つたのですから、それが生まれながらの子供達の性格となつてしまいます。青少年の非行、犯罪の低年齢化、家庭内暴力や校内暴力、これが増えるのは当たり前です。

目に見える原因に依つてしか物を判断しない識者は、教育が悪いとか、家庭に問題があるとか、社会に罪があるとか、いろいろ言いますが、(勿論、そこに二次的原因がある事は事実です)然し、真因は戦争による人心悪化である事を彼等とはとらえていないので、世の中は一向に良くなりません。

こうして戦争の傷痕は、親から子へ、子から孫へと継承され、人心は悪化の一途を辿つて来ました。

不戦のための発言

——いま、地球を滅ぼしつつあるものは何か
いま、地球を救うことの出来るものは何か

●ところが戦争にはもう一つ、人心を悪化させる要因があります。それは戦争が大量の物資を無駄に消費する事です。

鉄砲や弾丸にして消費するだけでなく、その鉄砲や弾丸によって大切な財貨を破壊します。だから、戦争は人間の心に、物の価値を軽視し、物の使い捨てを平気にさせる、悪い性格を植え付けます。

その最大の被害者もまた子供達です。彼等は使い捨て経済、使い捨て生活の中で育てられますから、しぜんに物は紙クズ同然だと思込んでしまいます。それと共に、もう物なしでは生きられない物に頼る弱い人間、また何でも物に換算してしまう打算的人間になってしまいます。つまり戦争は、弱いくせに自分本位で、打算的な物質主義者の顔に人間を作り上げます。崇高な精神性はそこから消え去ります。

●何千年の間繰り返し返した戦争によって、吾々の顔は、今どんな顔になっているのでしょうか。恐らくそれは、生命を虫ケラとする暴力主義者の顔、もう一つは、物質を紙クズのように濫費する物質主義者の顔です。いわば暴君の黒い顔と、頹廢の赤い顔です。それはまさに悪魔のもつ二つのマスクではありませんか。

ですから、人類が今、破局の日を迎えている事は当り前の事です。悪魔の黒い顔が、核戦争を引き起こす事が十分考えられます。悪魔の赤いマスクが、公害のタレ流しを平気でやり、生態系を破壊して、果ては天災を呼び起こすことも考えられます。またそんな戦争や公害に依らずとも、法と秩序を無視する暴君と異常人がはびこって、手がつけられない混乱の世が近づき

つつあることも想像できます。

人類はいま洪水の直前にあります。洪水というものは、水が危険水域を越すまでは、未だ危機感だけで洪水とは云えません。然し、いったん水が堤防を越すと、もうそれを止めることは出来ません。吾々はまさに今、堤防を越える水を見ようとしています。

その二 死んでも消えない怨念、それが人類を殺す

あなたは怨念をご存知ですか

●ところが戦争には、もう一つ、この破局を押し進める恐ろしい別の要素があります。いったい、その要素とは何か。

それは……実は、**戦争で死んだ戦死者達の怨念**です。ハテ、戦死者達の怨念が、なぜ、何を、どのように人類の破局を押し進めるのでしょうか。

戦死者がなぜ怨念をもつか、それはお分かりになると思います。先程私が朗読した詩の中で述べました通り、へ生が、無意味に抹殺されることは、恰度、死が無意味に復活されることのないように、厳粛な怒りだ」という事です。

つまり、人が此の世に生まれたのは、此の世で何かをするため、自分のため、世のため人のため。それが、戦争で生命を中断されることは、とり返しのつかない怒りとなります。まして、

不戦のための発言

——いま、地球を滅ぼしつつあるものは何か
いま、地球を救うことの出来るものは何か

意味のない戦争、日本の十五年戦争とか、アメリカのベトナム戦争とか、空しい戦争に、無理やり駆り出されて生を抹殺されることは、言いようのない悔しさとなります。然も、高度成長とやらの中で、生き残った人々が享樂に酔いしれているとすれば、特に若い戦死者にとつては、自分の生命が、紙クズか虫ケラであったことが、思いしらされて、何とも言いようのない怨念となります。

●だが、その怨念に気付く人は少ない、ほんの一握りの、戦死者の死を自分の死のように思いやることの出来る人達だけです。そういう怨念の存在に気付いている少数の人達がいます。

例えば『戦艦大和の最後』を書いた吉田満。私は海軍で半年間彼と同じ兵舎に居たことがあります。惜しいかな三年前に亡くなりましたが、その彼がエッセイの中で、こういう意味の事を言っています。「戦死者の怨念が、風のように雲のように、私の頭上を渦巻き流れて去らない」と。

また、回天特攻隊の生き残り、文芸評論家の松岡俊吉氏は「いま彼等は、顔も身体つきも、そっくりそのまま夢枕に現れる。だが、その戦死者の声はききとれない」と。

また、詩人宗左近氏は、鎮魂歌〈縄文〉詩集を書いた後、毎日新聞で次のような意味の事を語っており、「私は戦死者達を、『僕の内なる生者』と呼んでいる。私は彼等と会話し、議論し、慰め、喧嘩もする。彼等の霊魂はまだ慰められていない。だから戦争は未だ終っていない」と。私も全く同じように考えています。

●私は初め、戦死者を思い出して、鎮魂歌のようなものを書いていましたが、だんだん書いて

いるうちに、仲々彼等が成仏してくれないので、彼等のすさまじい怨念の存在に気付きました。だんだん彼等を問いつめていくうちに、その怨念の味が分かってきました。私は「戦い終らず」という詩篇の中でこう書きました（編注 詩篇省略しました）。書いたというより、幼馴染であり戦友だった戦死者孫尾徳次郎の声そのものなのですが、

〈祖国がさいあいの形で亡びるのを願う 俺達の身体のように冷えきって〉

この〈祖国がさいあいの……〉これは亡国の願いです。それは当然戦死者の怨念です。ところが、この裏にはもう一つ、祖国や肉親に対する愛があるのですね。私はまたこう書きました、いや彼はこう言っています。

〈おゝ、俺達まだ二十二の青春をかけて 愛する者よ 父よ母よ妻となるべき女よ
君達が二度とあざむかれない死のために〉

そのために亡国を願っているのだ、というわけです。なぜ、愛のために亡国を願うのか……戦死者達はどうやら、近未来に祖国の滅亡、人類の滅亡を、即ち地球の大洪水を予感しているようなのです。だから、悲惨な滅亡の時が来る前に、安らかに死んで呉れよ、と。それが愛する者たちへの愛、そしてこれが亡国の願いらしいのです。だから、彼等の怨念には、怨みと、愛と、人類滅亡の予感と、三つがコンプレックスとなつて渦を巻いています。

●私はこれを確かめるため、千鳥ヶ淵の無名戦死者の墓苑に行きました。そこで多くの戦死者の声を聞き、それが事実であることを知りました。知っただけでなく、実は彼等が、その怨念の実行のために、つまり亡国の実行のために、今さかんに動いていることを感じました。その

不戦のための発言

——いま、地球を滅ぼしつつあるものは何か
いま、地球を救うことの出来るものは何か

戦死者の一人がこう言っています。私の詩「軍靴のうた」の中で、

〈明後日、おれは人ひとりを突き刺す

街できれいに〉

私はこう書きましたけど、これは実は戦死者の生の言葉ナマです。そこで私は訊きました「いつたい、君は何人殺すつもりだ」と。すると、〈すべての人を殺したとき、波が静かになるのだ〉（詩「平家蟹」と答えが返ってきました）。

今、戦死者達の怨念が、日本といわず、世界中に渦巻いています。それが、わけの分からぬい通り魔殺人となり、青少年の麻薬流行、退廃の原因となったり、日航機事故のような事故の背景となり、はては、国際的な摩擦対立をあとおり、世界の軍拡競争の熱をあおったりしています。

● 皆さん、私が今申しました事は、単なるたとえ話、比喻とお聞きになっても結構です。また真実だとお聞きになっても、どちらでも結構です。唯、私はこの耳で聞き、この心で感じた通りを申し上げただけです。

要するに私が言いたいことは、戦争で国が守られるとか、良い世の中になるとか、自由や民主主義が守られるという、レーガンやブレジネフや、世の偉い先生方の考え方が、途方もない間違いだという事を言いたいのです。また、武力や戦争で吾々の安全や幸福が守られるという、世間一般の考え方が、根本的に間違いだという事を言いたかったのです。

そうではなくて、戦争は人間を駄目にして、さまざまの混乱を起こし、次の戦争の種を生み出すものです。それだけでなく、無数の戦死者達の怨念が働いて、やがて、人類を破局へ導く

ものです。

今、今次大戦で死んだ何千万の戦死者達の怨念が世界中に漂っています。そのため、この地球は二十一世紀を待たずして、あるいは二十一世紀そこそこに、もう駄目になるかもしれない、私は今そう感じています。

三、近代科学の「魔性」性

生まれも育ちも魔性

●いま私は、人類は二十一世紀を待たずに、もうそこそこに亡びると申しましたが、それは何によつて滅びるのでしょうか。それは、人類が、自分の手で首を締めるのです。文明の名に於いてです。その文明とは、科学技術文明です。つまり**科学技術文明とは、人類を滅ぼす魔性、その体質は悪魔**なのです。

すると、ハテ科学技術はむしろ、人間を救い、世界を豊かにする救いの神ではないかという反論が出てきます。確かにそうかもしれません。例えば、スイッチ一つで噴水のように財貨を生み出し、ロケットに乗れば宇宙へ飛び出し、神にも匹敵するコンピューターという頭脳を生み出したのですから。いわば地上のパラダイスを創り出したわけです。